# 南方軍総司令部で迎えた終戦

池田鉄亮（えいすけ）　鹿沼市

鹿沼の天神町で生まれました。後に大学から戦地に行き、終戦を迎えるまで、私の青春時代は戦時色一色でした。「日本が勝った」と言っては町内の提灯行列にも出ましたし、中学時代は大東亜戦争（太平洋戦争）の前の支那事変の頃でしたが、出征兵士の見送りもしました。

●学生時代の思い出

宇都宮中学（現 宇都宮高校）に鹿沼から鶴田まで汽車で通いましたが、1年間の通学定期券が17円くらいで、切符を買うと片道8銭だったと思います。

当時の上野町の駅前の通りは、現在のように舗装などされておらず砂利道で、車道と歩道の区別がなく、道の右側に帝國製麻の社員の平屋の社宅が並んでいました。

当時、荷物の運搬や材木などの運搬は、たまに貨物自動車ということもありましたが、たいてい馬車で運んでいましたので、よく馬が歩きながら馬糞を落としていきます。それが乾いてズボンのすその折り返しに入ったので、帰宅後、家に上がる前にブラシで払ったものです。（当時のズボンのすそには折り返しがありました）

昭和10年（中学1年）に二・二六事件がありました。学校が休校になり、自宅に戻りましたが、大人たちが近衛の赤坂三連隊が反乱を起こして、宇都宮の連隊が鎮圧に出動したと心配していました。私の父が赤坂の歩兵三連隊の退役なので、特に心配していたのを憶えています。

朝の通学時に上級生に会うと軍隊式の挙手の礼で挨拶することになっていますので、欠礼するとお説教され、拳骨をもらうことになります。通学の汽車の発車時刻は、夏季が午前7時11分、冬季が8時8分で、3年生くらいまでの低学年は余裕をもって家を出ますが、4年、5年くらいになると発車時刻間際に駆けこんで、2番線に行くのに橋を渡らずに線路を突っ切って乗るような豪傑もいました。駅員も一応注意はしますが、見て見ぬふりのこともありました。

日光、今市方面からの男女の通学生も多く、当時は尋常小学校1年から男女別に教室が分かれていましたので、慣習で女学生は前の1両目に乗り、男子生徒は2両目以下に乗ることになっていました。

通学の履物は編み上げの革靴でしたが、軍隊用の皮革需要が増えたため、民事用の物資節約で昭和13年4月に学校から「物資節約のため登下校に皮靴着用に及ばず」の通達が出たため、草履とか下駄で通学するようになり、低学年はズック靴やゴム裏草履や駒下駄で通学、4、5年生は朴歯の高下駄で通学するようになりました。足は汚れ、それで校舎内、校庭と所かまわず駆け回っていたので、教室などずいぶん汚れていたと思いますが、いったい誰が掃除をしたのでしょうか、私は掃除をした記憶がありません。

ある日曜日に、7、8人で朴歯の高下駄で古賀志山に登ったことなど、また低学年の土曜日の午後、鶴田から鹿沼まで線路伝いに2時間くらいかけて7、8人で歩いて帰ったことなども懐かしく思い出されます。

昭和14年4月、5年生になったので、記念になるものを残そうとプールを作ることになりました。学校の創立当時から東にあった瓢箪池を掘削し、8月には立派な25㍍プールが完成しました。今でも後輩たちが水泳を楽しんでいるはずです。

当時中学では軍事教練が義務付けられており、毎年秋に4、5年生だけ、栃木県の中学校を南軍と北軍に分けて3日間の秋季大演習が挙行されました。軍から派遣されている配属将校の指導で、行軍中の前衛、後衛、側衛とか、夜の宿営の歩哨の警戒、不寝番の心得などの教育を受け、最終日の前夜は、1時間おきに小休止をしながら寝ずの夜行軍が行われました。宇都宮市北部の宝

富士演習場でのスナップ

木練兵場（終戦後は県営住宅地になった）で薄暮の南軍と北軍の遭遇戦が行われ、歩兵銃の空砲を撃ち、最後に銃に短剣を装着して喚声をあげながら突撃をする「白兵戦」で終わるのが通例でした。

宇都宮中学の配属将校が斎藤という退役の大佐でしたが、まったくの偶然ですが、大学でも同じ人が教官として配属されてきたのには驚きました。

中学１、２年のとき、川上澄生先生に英語の副読本を習いました。先生のあだ名は由来はわかりませんが「ハリさん」で、英語の発音はアメリカなまりでした。

正式の英語教師は斎藤先生で１年生の英語は１学期で終了し、９月の２学期からは２年生の英語を習うという進み方で、国漢はともかく、特に理数系は追いついて行くのに大変苦労しました。５年生になって進学するのに、私の学力では国公立は諦め、私大に進学することにし、鹿沼出身で東京帝大を出て、法政大学の経済学部の教授をしていた渡辺佐平教授（後に学長となった）を頼りに法政大学に入ることにしました。

昭和15年４月法政大学専門部政治経済科に入学、17年９月に、６か月の短縮繰り上げで卒業し、翌年18年４月法学部に入学しました。

●富士山のふもとでの軍事教練

学生時代には富士山の裾野で軍事教練を受けました。軍の宿舎に寝泊まりして教練するところが３か所（滝ケ原、板妻、駒門）あり、春と秋に学生は１週間ずつ軍事教練を受けましたので、富士の裾野には合計10回くらい教練に行きました。

それまでの教練の最後、昭和18年秋の教練の最終日には富士の裾野の御殿場から仙石原を通り、途中一泊して小田原まで行軍しましたが、疲労はもちろん、足に豆ができて、落伍する者も出始めたので、皆で助け合って頑張り、歩き通しました。小田原からは汽車で帰京しました。普段の教練は代々木の練兵場を使用していました。

●陸軍に入隊

当時の学生は、海軍と陸軍のどちらかの試験を受けさせられ、私は陸軍に入りました。昭和19年６月１日、私は陸軍の特別操縦見習士官の第三期生（６００名）として熊谷飛行学校に入りました。

家に苦労をかけたのは、一般の兵や下士官などは服や身の回り品などは官給品が支給されますが、将校は軍刀や夏冬の下着など私物で、将校行李に入った軍装一式を５００円で買わなければなりませんでした。

下関で

当時５００円というのは大金で、父は帝国製麻に勤めていましたが、月給１２０円くらいだったと思いますので、４か月分の給料に相当し、大変だったと思います。

私の家に、長船の「長船住左尉春光」銘の大刀と「春光」と子供の「治光」との合作の銘のある小刀の（作り）の素晴らしい大小がありましたが、父の知人に理由を説明して５００円で譲り、軍装代に充てました。

６月から９月までグライダー訓練を受けた後、２００名ずつ内地残留組、南方組、満州組の３班に分かれ、私は南方行きとなりました。

戦後わかったことですが、私が入隊したその直前、サイパンが陥落、宇都宮の第14師団がパラオ諸島に上陸して、ペリリュウ島で玉砕しています。そういう戦局の時代でした。

●いよいよ戦地に

昭和19年９月25日、下関から連絡船で門司に行き、輸送船に乗船して三池港で燃料の石炭を積み、他の輸送船と８隻の船団を組み、護衛の駆

逐艦と台湾に向け出港しました。

沖縄付近の海域は米軍の潜水艦に撃沈される輸送船が多く、無事を祈るような気持ちで通過しましたが、運よく無事に10月4日頃、台湾南端の高雄港に着きました。貨物の揚げ降ろしが済み次第出発する予定でしたが、フィリピン方面から米軍の有力な機動部隊が来襲、台湾、沖縄日本の航空基地が艦載機の急襲を受けて甚大な損害を受けました。

高雄港も湾内の艦船や港湾施設が損害を受けました。我々も高雄市の10㌔くらい北方の小学校に避難しました。豊田連合艦隊司令長官も「捷一号作戦」を発令、比島（フィリピン）の第一航空艦隊・台湾の第二航空艦隊・内地の日本航空艦隊の総力を挙げて反撃に出たのが「台湾沖航空戦」と呼ばれ、連合艦隊から誇張された戦果（航空母艦撃沈10隻、破壊5隻、戦艦撃沈2隻、破壊2隻、巡洋艦撃沈3隻、破壊4隻）が発表され、内地では、軍艦マーチで沸き立っていたそうです。

このとき、海軍の関大尉による特攻隊が編成され、江戸中期の国学者「本居宣長」の詠んだ「敷島の大和心を人問わば朝日に匂う山桜花」から取って、敷島隊・大和隊・朝日隊・山桜隊の名を付けた初めての「特攻隊」が編成されました。

その後低気圧が接近し、11月の中頃、内地から着いた輸送船に乗船、中国大陸の沿岸に沿って南下し、海南島、仏領印度支那（ベトナム）のサイゴンに寄り、昭南（シンガポール）に昭和20年1月中頃着きました。

ここでマレー半島とジャワ島に１００名ずつ分かれ、私はジャワ島に行くことになり、沿岸航路の小型輸送船でジャカルタに、その後は軽便鉄道でスマランに着き、独立一〇六教育飛行団として単座の九七式戦闘機と九八式直協を複座に改造した高等練習機で操縦訓練を受けることになりました。我々は知る由もなかったが、1月の初めには米軍は比島ルソン島のバタアン半島に上陸作戦を開始しており、このような場合に操縦訓練をしていても無駄なことで中止になりました。

●沈没した軍艦から脱出―6時間の漂流

シンガポールで分かれていたマレー半島方面班と合流することになり、昭和20年6月8日、重巡洋艦「足柄」に便乗してシンガポールに向かう途中、12時頃、スマトラ島とバンカ島の間のバンカ海峡でイギリスの潜水艦（トレンチャント）から6発の魚雷を右舷に受けて右に傾いたため、退艦命令が出て、反対の左舷から海に飛び込みました。

海に飛び込むとき、泳いでいる者が小さく見えたので7、8㍍くらいの高さがあったと思います。飛び込むときに救命胴衣で顎を打たないように注意されていたので、軍刀を持ち、胴衣をつかんで飛び込みました。何㍍くらい潜ったのでしょうか、上を見たらキラキラ光る水面が見えて、息を止めてもがいて海面に出るまで水を飲みました。

「足柄」がすっかり沈むまで15分くらいでしたが、沈む艦に引き込まれないように、なるべく艦から離れるように言われていたので水をかきますが、なかなか進まず焦りました。「足柄」がまさに水中に没するところを最後だと思い、泳ぎながら皆で敬礼しました。

近くの浮流物を集めて腰の紐で縛って筏を作り、怪我をしている者や救命胴衣のない者を上に乗せた20人から30人くらいのグループが、海上のあちらこちらに浮かんでいて、元気をつけるため皆で軍歌を歌っていましたが、だんだん心細くなった午後6時ころ、スマトラから船舶部隊「暁」の木造の機動船が多数救助に来てくれ、敵の潜水

降伏式の様子
上：シンガポール、板垣征四郎、下：サイゴン
（写真：ウィキメディア・コモンズ）

艦に爆撃攻撃をしていた駆逐艦「神風」も来てくれたので安心しました。昼食を当番が取りに行ったときにやられたので、空腹のまま、救助されたのは6時頃でした。

「足柄」は1万3千トンの重巡洋艦でお城のようでした。これなら大丈夫と思っていましたが、結局はやられました。

●スパイの教育を受ける

救助された我々ジャワ島班とマレー半島班が再び合流したが、将校としての教育が中途半端な我々の処遇をどうするかを南方軍総司令部で検討した。その頃、南方各地に上陸すると予想される連合軍の後方に残留潜伏し、後方攪乱、破壊工作などを任務とする参謀部付の情報部員として、各地の部隊や「特務機関に」20名くらいずつ分散配属し「残地諜者」としての教育を受けさせ、フィリピンのルバング島で活動している小野田少尉と同じ任務に就けさせようとしたようです。

そこで我々20名の班は南方総軍の参謀部二課に配属されることになり、うち笠間見習士官以下8名は数日前に我々を救助してくれた潜水艦「神風」に便乗してカンボジアに上陸しました。プノンペンからメコン川を下って8月初め仏印のサイゴンの南方軍司令部の参謀部二課に着任しました。二課長の矢野大佐に申告して、宿舎（市内のスポーツクラブ）を割り当てられ、そこで軍服を脱ぎ、私服に着替えて民間人と同じ格好になりました。

陸路、鉄道でマレー半島方面からサイゴンに向かっていた12名はマレー、タイ、カンボジアを通り、昼間の英軍機の襲撃を避けながら、遅れてサイゴンに着いたのは、8月15の終戦の後でした。我々を教育する教官は「中野学校」第一期生の古参の安藤大尉でした。

ある日、参謀長の沼田中将に一人ずつ呼ばれ、家族のことなど尋ねられ、「戦局厳しき折、がんばってくれ」と激励されましたが、見習士官に参謀長が直接激励訓示するなど、異例のことです。

「残地諜者」としての基本的教育を始める日程も決まらないうちに数日で終戦になりました。

●終戦受入れ・降伏式

南方総軍でも8月15日の正午、全員集合して雑音で聞き取りにくい天皇陛下の玉音放送を聞き、徹底抗戦派と終戦受入れ派などと多少混乱がありましたが、終戦受入れに落ち着きました。

我々見習士官は南方総軍の膨大な書類の焼却を命ぜられ、総軍内の空き地で周りを金網で囲い、焼却するのに4日くらいかかり、総軍内が灰だらけになりました。日本が降伏したとき、南方総軍司令部で降伏式というのをやりました。司令部でしたから兵隊は少なく、将校が何百人もいましたが、参謀部二課だけで20人くらいいて、尉官より佐官クラスが多かったと思います。

降伏式ですが、イギリスの将校が正面にいて、その脇にグルカというインドの兵隊が銃を構えて八の字に並んでいました。日本の将校が右から3人ずつ進み出て、最初にユニオン・ジャックの旗に敬礼し、軍刀を外し、帽子を脱いでお辞儀をして戻ってくるのです。

南方の将校だけでも数百人いたか、軍刀が山のようになりました。位の上の人は立派な軍刀を持っていたから、良い刀もあったはずです。私の軍刀は「昭和刀」といって、50円くらいの刀で、日本刀の格好はしていたが、とても人は斬れない刀でした。海に飛び込んで漂流していたとき、刀身が錆び、鞘の中の塩気を抜くのにしばらくかかりました。

●寺内元帥・横山中佐の出頭

南方軍の司令長官寺内寿一元帥が、戦犯として

シンガポールの連合軍のマウントバッテン司令長官に出頭するよう命令され、サイゴンの港から出て行くとき、みんなで手を振り見送りました。戦犯に指定される前に病死されましたが、戦犯として刑に服する前に亡くなられたことは、むしろ良かったかもしれません。

私が参謀部の二課にいた時、横山という憲兵中佐がいましたが、英軍の司令部から彼に出頭命令がかかり、私は中佐の私物の入った鞄を持って刑務所まで送っていくよう指示されました。横山中佐は参謀部に来る前は、マレーのクアラルンプールの憲兵隊司令部の長官だったそうです。泰緬鉄道というタイからビルマへの鉄道建設に、英軍の捕虜に重労働を課して虐待した責任で戦犯として重い刑が科されることが予想され、本人もある程度覚悟はしていたのか、青ざめた表情でした。

刑務所の敷地に入ったとき、元憲兵隊の下士官とか、元連合軍の捕虜収容所の監視でもしていたかと思われる十数名の日本兵が褌だけの裸で、褌に階級章を付け、通路の補修工事をしていました。そこは元は日本の刑務所だったそうです。

罪の軽い者は何年かで日本に帰れましたが、そうでない重い刑の者は絞首刑になった者もいて、捕虜を虐待したということで捕まったのは憲兵が多かったようです。参謀部でも戦犯の指名を恐れたのか、憲兵隊の准尉と下士官の 2 名が拳銃で自殺しました。戦争に負けるということは、ひどいものです。

●終戦業務

勝ったイギリス軍中心の東南アジア連合軍と南方総軍との終戦業務連絡協議会（リエーゾンオフィス）の終戦連絡中央事務所が設置され、接待などの業務の手伝いなど、双方の連絡将校の接待係をしました。仏印の各地の部隊から保管されていた日本酒、洋酒、ワイン、肉、野菜などや日本料理の板前、洋食のシェフなどの前職者やきれいな現地の女性まで集めたりもしました。

●独立運動に巻き込まれる

そのうち終戦後何か月か経って、仏領インドシナ（現在のベトナム・ラオス・カンボジアを合わせた地域）の独立運動が始まりました。フランスの軍隊が鎮圧に行くのですが、仏領インドシナの市民に逆に包囲されてしまったり、食糧の買い出しに行っても、売ってもらえず、日本が代わって食料の調達をするようなことも連絡将校がやりました。

夜、サイゴンの市内でも市街戦があり、私達の宿舎にも弾が飛んできて危ないので、ベッドを壁際に移して寝ていました。

独立運動の市民たちが、日本軍の武器を手に入れて使っていましたが、素人ですから、日本の兵隊を教官にして戦争の仕方などを学ぼうと、待遇など好条件で、若いきれいな女性を使って勧誘していました。全土から数百名の日本兵が脱走し、私が週番士官の時、夜中に、下士官兵が 8 名脱走し、監督不行き届きで 1 週間の謹慎を命ぜられました。脱走した兵隊のほとんどが仏軍の掃討戦で戦死したり、病死したりしたと思われますが、数年前、奥地で安南人と結婚した日本兵が見つかったという報道がテレビでありましたので、見た方もいると思います。

日本兵の勧誘はベトナムだけでなく、中国では蒋介石の国府軍と毛沢東の共産軍との間で国共内戦が激化し、国府軍は台湾に退却しました。日本からタイ方面軍に出向していた大本営作戦参謀として当時有名だった辻政信参謀が国府軍の作戦を指導しています。戦後、米軍から戦犯に指名されて地下に潜行し、有名な「潜行三千里」の本を出しました。その後政治家になり、出張先のラオスで行方不明になっています。

●復員前

復員船に乗る 3 か月くらい前、あちこちに分散していた部隊がメコン川の河口にあるサンジャックという港の近くに集められ、我々は漁労班で魚（メコン川の支流のマングローブの間の小魚）を獲り、農耕班が作った野菜と交換したりしました。

兵隊には軍隊に入る前、いろんな職種の者がいて、浪花節、落語、講談、歌手などの本職だった

者もいて、1 週間に 1 度くらいでしたが演芸会もありました。

復員船に乗る 1 週間前に、脱走した兵隊のうち、今でも名前を憶えていますが、山梨県出身の山田という上等兵が戻ってきました。旧軍隊なら脱走の罪で重罪になるところでしたが、終戦後でやむを得ず不問にしました。ほかの兵の事を尋ねましたが、仏軍との戦争で戦死したり、病気になっていたりしているとのことでした。

●日本へ

参謀部の二課に商社の社員が 7 、8 人通訳に来ていましたが、先に日本に帰る人がいましたので、私が無事でいることを手紙に書いて、わたしの家に送っていただくようお願いしたので、家では私が無事でいることはわかっていたと思います。

復員船に乗ったのは昭和 21 年 5 月 28 日、復員船に改造された小型の航空母艦「津軽」（飛行甲板が米軍の艦載機に攻撃されて破壊されていたが航行はできた）に乗船し、メコン川の河口から広島の大竹港まで 1 週間くらいかかり、日本に着いたのは 6 月 5 日でした。九州と四国の間の豊後水道を通過したのは夜が明ける頃でしたが、懐かしい九州や四国の山や陸地が見え、死を覚悟して行った南方から無事に帰れた嬉しさで感無量でした。

大竹港に着き、大きなお風呂で体を洗い、出てきたら出口にアメリカの兵隊がいて、頭から殺虫剤（DDT）をかけられました。身体にシラミがついていた兵隊がいたからです。南方ではイギリス軍でしたが、日本への進駐軍は米軍でした。

大竹で復員式をやって、百円札で５００円もらい、大金だと喜びましたが、貨幣価値が下落していたので大金ではなかったのです。

復員列車で東京へ向かい広島を通過したとき、煙突とか焼け崩れたビルとか、一望がれきと化した惨状に原爆の破壊力の恐ろしさを目にして、日本の敗戦を実感しました。

上野から東北線に乗った時、周囲の乗客が宇都宮も空襲されたとか、鹿沼も爆弾を落とされたとか話をしていたので、鹿沼駅を降りて、駅の交番で「天神町の付近はどうでしたか？」と聞くと「戸張町と泉町に焼夷弾を落とされたが、天神町辺りは大丈夫だ」と言われて安心しました。隣の増田さんに電話したところ、迎えに来てくださるとのことで、リヤカーを引いて迎えにきていただきました。

2 年ぶりに我が家に帰り、連絡した父も会社から戻り、弟や妹もそろって私の生還を喜びました。とりわけ、南方行きだったので万一の覚悟もしていた母の喜びは、また特別の感慨があったと思われました。

●復員後

父が 55 歳で定年退職し、退職金を 5 万円もらいましたが、銀行預金は金融封鎖になって払い戻しが制限され、新円との交換も一人１００円に制限されたため、貨幣価値が下落して、終戦直後のあの苦労は大変でした。